

(財)国土計画協会理事長代行)

明治44(1917)年8月佐賀県東松浦郡相知町に生まれ、昭和11(1936)年早稲田大学(建築科)を卒業、直ちに学友とともに旧満州国政府に就職。外務省証明によれば昭和13(康德5)年6月営繕需品局技士、建築局と改正、同15年7月同局技佐として専ら国都新京の第一期5ヶ年計画(昭7~12)後の建築関係に関与する。同年11月には臨時国都建設局技佐兼任。かくして秀島の中に新京(都市計画)像が成熟しその一生から離れることがなかった。(昭和48年9月「秀島乾と夫人を偲ぶ」会記事、ECO刊参照)。即ち戦後逸早く(昭33)海外視察の帰途万難を排して戦後の新京の実情の確認を行った如きは其の執念の一端が窺える。ところで旧満州国全域に関する都邑(向)計画法は、近藤謙三郎(都市計画144号で紹介)都市計画東京地方委員会技師が渡満後、我国都市計画法を母型とし、併せて旧「市街地建築物法」をも併合した統一法体系として昭和11年6月に成立した。建築家との関係も深い。先づ秀島の上司奥田(勇)が兼職のまま法成立に関係しており、次いで都邑計画司(交通部)設置に伴い滝川が内地から専任就職(昭和14)、ついで三代目に秀島が専任(昭和16年3月、交通部技佐)している。その頃都邑計画法の改正作業が始まっている。正に秀島は猶魚之有水の感銘を受けたにちがいない。新法(昭和17

年12月成立)の中に所謂近隣住区単位(新法に集団住区)の手法を導入させたのも彼であり、この新知識は帰国後も彼のしばしば活用するところとなった。

終戦後は役人生活に入らず専ら独走体制を堅持するとともに奇抜なアイデア・マン(自称計画士)に徹している。その間逸早く(昭26)東京高速道路会社の高架式(スカイ・ウェイ)の立案に参画しているし、ついで日本都市計画学会の成立(昭26)にも石川・北村等を助けて、大いに貢献している。更に日本住宅公団設立(昭30)とともに発足した住宅団地(第一号)常盤平の設計計画にも卒先参画し、華々しい成果をあげ学会の表彰(昭37)を受けている。そのほか全国各地の主要都市(例:長崎・八幡・広島・大阪・神戸等)に幅広くそのアドバイザー・コンサルタントとして多くの助言を行い、その成果も知られている。就中晩年、神戸ポート・アイランド地区利用計画に参画、これは所謂今日流のウォーター・フロント地区開発の先駆的計画への関与といえる。惜しくも昭和48年1月死去。享年63才。

